

新刊
紹介

祝 第60回(2022年度)北海道詩人協会賞 受賞!

小篠真琴詩集『へいたんな丘に立ち』文化企画アオサギ 2022.5

今金町在住の詩人小篠真琴氏は本名の越野誠で2021年10月当協会に入会。POLE105号に《新会員のひと言》と、更に「オンラインコンサート“〈シロンスク〉との旅”を観て」にも感想を寄せ、107号には詩「この町に生まれ」を発表した。コロナ禍で仲々参加できなかったようだが最近二度ほど行事参加があったのでご記憶の方もおられるでしょう。

少年はいま、つばさを手にした

2018年の第一詩集『生まれた子猫を飼いならす』は大好評で一気に存在感を示した。

2022年には第二詩集『へいたんな丘に立ち』を發行。カバー写真は著者の撮影。難しい言葉や言い回しはなく素直に読み進められ、こちらの胸にひたひたと沁み入る安らぎと暖かさのある詩集と思った。小篠さんの半生に裏打ちされた“痛み”から浮かび上がる澄んだもの、それに魅了された。

全国各誌で絶賛されている！との声が届いた頃、ビッグニュースが飛び込んだ。日本詩人クラブ主催の第33回新人賞に上位ノミネートされたという。これだけでも凄いのに日本現代詩人会主催の第73回H氏賞(詩の芥川賞ともいわれる新人賞)第1次選考でも上位にて候補となる。こんな大きな賞二つ同時に候補になるとは！ドキドキし乍らの結果は誠に残念乍ら本賞受賞には至らず。でもでもこれは凄い事なのであります。

詩集のあとがきも実に好ましいものです。「詩篇たちに私の夢を叶えて欲しい」に続く師への感謝の言葉も素直に伝わりますし、お終いは「新しい旅はまだ始まったばかりだと気づいた日に、また一歩ずつ歩いていきたい」との柔らかな決意表明も清々しい。

小篠氏の活躍の場は広く、道内では「フラジャイル」「Asgrd」「極光」他、道外では「指名手配」他多数。詩の他に小説を「ざいん」に発表、トップに掲載された。短歌、俳句でも賞に入り今はエッセイに挑戦中。どこ迄飛躍していくのだろうか。

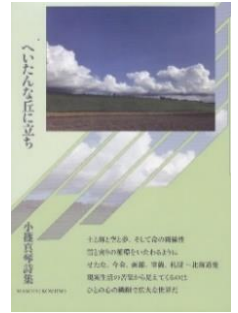
詩集の作品はどれも魅力いっぱい、特に北海道弁が迫力の「投資家気取りを」、シュールながら温もり溢れる「朝のひと時」、指から離れたほくろがイソギンチャクに棲み着き再び帰ってくる「ツアラトウストラを聴きながら」、「ふるえる木を／そっと包み込むように支える」から始まる「支える」等が際立っている。

何らかの方法で当協会会員の方々にも目を通して頂けたらと願う。

最後に一番好きな詩を一部分ではありますがお届けして終わりたい。(菅原三栄子、会員)

つまずいた少年

～略～ 足を挫いたふりをした少年は／
すり傷だけで／済んでいたから／スニーカーのひもをむすび直せば／トップランナー／少年はいま、つばさを手にした



『ポーランドィア～最後の夏に』 工藤正廣(著) 未知谷 2022.9

ロシア文学者で詩人の工藤正廣さんが、小説『ポーランドィア』を未知谷から上梓(じょうし)した。小説と言われるとご本人は違う、と言うだろうが、今はこの国の文学上のジャンルにしたがっておく。一読してこれは、著者がどうしても書いておかなければならないものだ、まず思った。

むかしの夢幻 時を得た物語

冒頭の悪い夢を読むと、このような書がなぜ、いま書かれなければならないかが、分かるような気がする。いわば時を得た書物だ、これは。

「洞窟のドラゴンのように火を吐いて、(中略)殺戮(さつりく)を原理とし(中略)大地を赤い血と骨で肥沃(ひよく)にしてきた」とうそぶくカフカス訛りのポリシェヴィキの長老はスターリンで、彼に真夜中呼びつけら

れる都会人のヴォロージャは、明らかに今年2月に理不尽なウクライナ戦争に突入したロシアのプーチン大統領なのだ。また本編の語り手マサリクは作者そのひとであろう。

文体はそれこそ変幻自在で手紙になったり、回想になったり、はたまた詩が何度も引用されて読者を飽きさせる事がない。



箴言めいたものがいくつも散見し、このあとこの書のページを渉猟すれば、一冊のアフォリズム集ができるようにも思った。たとえば、こんな言葉がある。

「いったいわたしたちは何であったのか、(中略)ぼくらはたとえて言えば、一冊の詩集なのだ。記憶の詩集なのだよ」

また「どんなに悲惨な暮らしであれ、人生に献身すること、その希望で生き抜くこと。歳月はたちまちに過ぎ去り、終焉(しゅうえん)すること。夢のような活力のある青春は、終焉する。その時こそ、献身が希望になるだろう。まことに近くにある者を愛せよと言うが、それは愛することがまだ容易だということなのだ。憎悪によって生きることはできない。愛する心でなら、どのようになっても生きることができよう」

あるいは「出会いとは奇跡の別名と言っていいかな。人は出会いの集積そのものだ。出会いの金庫だよ」

「いのちはことばだ。そしてことばはいのちだ」

が、この作品の圧巻はポーランドのロシア詩の老研究者、リラック氏から何枚かのドル札と手紙を託されたマサリクが、パステルナークの愛の片腕、オリガ・イヴィンスカヤを訪ね、懇親するシーンだ。ここはあまりにも

感動的なので、引用はひかえる。そこで彼女は、マサリクを歓待しながら彼にパステルナークの詩をそらんじるように促し、マサリクが応じて、詩が音楽のように流れるとイヴィンスカヤがたちまちそのあとをそらんじる場面だ。

「発着駅よ ぼくのかずかずの別れの／出会いと別れの耐火性の抽斗(ひきだし)／ぼくをみちびく経験をつんだ友／ひとたびその功績を数え上げれば——きりがない」

本邦の現代詩の世界では絶対ありえないものがそこにはある。現代日本では、詩が音楽であるという真理は無視されているから。

あえて結論は不要とおもう。著者はあとがきで言っている。「四十年も過去の、むかしの夢幻(ゆめまぼろし)を、ようやく今ごろになって、新しい物語として蘇生(そせい)させることが出来た。(中略)この物語は頌歌(しょうか)でありまた鎮魂歌でもあるだろう。(中略)これは現実のおとぎ話なのだ」

工藤さんはロシア文学者として数々の榮譽にも輝き大きな成果をあげてこられたが、ここでご自身のいちばん言いたいことを言いきってしまった。

(瀬戸正昭、詩人、詩誌「饗宴」主宰)

(初出)北海道新聞2022.12.13

THEATER
K I N O

シアターキノ30周年に寄せて



中島 洋

1992年にシアターキノを設立して昨年の2022年で30周年になりましたので、少しだけ振り返ってみます。

私は北大映画研究会員だった1970年頃に映像の自主制作、自主上映を始め、中退して東京でCMやPR映画の撮影助手、ピンク映画の助監督などを少し経験しましたが、今でいうパワハラがある業界にぶつかってしまい、出身の神戸ではなく、札幌に戻り、小さな飲み屋をやりながら、自分でインディペンデントな映像を創るようになりました。

やがてそれはビデオアートや、インスタレーションなどのアート作品や舞台美術など、映像を中心とした表現の分野をひろげるようになりました。同時に、その表現を発表する場がほしくて、演劇、美術、舞踏、写真、音楽などの仲間と一緒に「駅裏八号倉庫」という自由な表現空間をつくり、5年半で解散後、映像ギャラリー「イメージ・ガレリオ」を、友人たちの出資を集めて作り、妻が運営の中心になりました。

そして、1992年に、札幌のミニシアターが閉館になり、商業アート作品が見れなくなるという危機感から、市民出資を募って(まだNPOやクラウドファンディングもない時代でした)、ミニシアター「シアターキノ」を設立しました。29席という日本一小さな映画館でした。

はじめはやはり赤字でしたが、4年目から黒字になり、1998年に2スクリーン体制のミニシアターになり現在に至るわけですが、私としては映画館を作るのが人生の目標ではなく、その時、その時で、札幌にないもの、文化の「場」作りを自分なりに考え、役割としてやってきたように思います。

シアターキノをベースに、ワークショップや講座、映画祭や芸術祭の手伝いなど、本当に様々な文化活動に関わってきましたが、キノ設立と同時に休止していた、自分自身の制作も5年前から再開し、映像作家、美術家としての作品制作をしています。遂に念願の短編映画「Wakka」が完成し、4/22(土)～28(金)にシアターキノで公開いたします*。水の起源を探る映像と音だけで表現した抽象的な作品ですが、ぜひご覧いただければ嬉しいです。

ポーランドのウジツ映画大学に留学し今や日本映画を支える一人になった石川慶監督からも「映画がなにを語るためにうまれたものなのか、それをあらためて教えてもらった」とコメントをいただきました。また、キノ30周年記念出版『若き日の映画本』にも監督に人生の一本として「灰とダイヤモンド」を書いていただきました。シアターキノにて好評発売中です。(なかじま・よう)



* <https://www.wakka-movie.com>